

京都大学 京都着物企画

着るから知る、その先へ — 丹後ちりめん産地訪問

受賞：実践アクション賞

■ 発表概要

「着物を着る活動から、作る現場を知る活動へ」。若者に伝統文化の魅力を伝える学生団体が、京都・丹後地方のちりめん産地を訪問し、産業の現状と職人の思いを肌で感じた実践レポート。

■ 産地の現状

丹後ちりめんの危機

- ・生産量：最盛期920万反→現在約15万反（1.5%）
- ・事業者数の激減・後継者不足・高齢化
- ・全国の着物生地の7割を担う産地が存続の岐路に
- ・産地全体でのブランド再発信・オープン化が進行中

訪問スケジュール

- ・1日目：与謝野町（織元・工房訪問）
- ・2日目：京丹後市（事業者訪問・工場見学）
- ・職人・染師計2名に深くヒアリング
- ・年齢・専門が異なる5名で訪問（着物好きが共通点）

■ 職人から学んだこと

〈ゆとり様（絹織物）〉

着物1着に約2,600匹の蚕の命が必要。職人たちは蚕を「蚕さん」と呼び、命と向き合い続ける営みとして産業を捉えている。「私たちが辞めれば蚕も絶滅する」という言葉に、産業の本質的使命を感じた。

〈小林染工房 小林様〉

コロナ禍の苦境の中でSNS（YouTube・Instagram）発信を開始。技術の高さと前向きな人柄が伝わり、オーダーが増加。「作りたいものを作り続ける姿勢」×「価値を発信する姿勢」の両輪で伝統継承を実践。

■ 学びのまとめ

- ・丹後ちりめんは一人では作れない：300年の「人と人のつながり」が産地を支える
- ・着物は衣服ではなく、地域・技術・作り手の思いが重なる文化である
- ・作る現場を知ることそのものが継承の一部

■ 今後の活動方針

着物の価値を「想いの結晶」として捉え直し、若者の言葉・感性で製造過程や職人の思いを発信する。知ること→興味→着る人が増える好循環を生み、産業への貢献を目指す。

■ 審査員コメント

「着物でプレゼンしていることそのものが矛盾がない。職人のリアルを若者の言葉で伝えようという姿勢が、地域を応援する中で最も大事なこと」（杉岡審査員）

